

富士見市域の鳥

富士見市域の鳥類について、昭和55年(1980)9月～57年(1982)8月の2年間にわたり調査が行われ、約100種の鳥類が記録されています。その調査と分析などの内容が、『富士見市史(上巻)』に記載されています。

その冒頭では「鳥類は最も基本的な採餌と繁殖を基準とし、その形態に適応した環境に生息する。鳥にとっての生息環境が、複雑に入り組んでいれば、生息する鳥類の分布構造を解析することは大変難しい」としている。

ここでは、まず市制施行40周年の「市の鳥」、「その候補の鳥」及び「埼玉県の鳥」を、『郷土富士見検定問題集』から記載し、その後約100種類の鳥のリストを載せます。

■市制施行40周年(平成24年(2012)4月)を記念して「市の鳥」が決定。

『カワセミ(翡翠、翡翠、魚狗、川蟬)』

「カワセミ」は、ブッポウソウ目カワセミ科で、大きさは約17cm 翡翠(ひすい)色と橙(だいだい)色の体色と長い「くちばし」が特徴(とくちょう)の、水辺の鳥です。「翡翠(ひすい)」や「水辺の宝石」とも呼ばれ、英語では「キングフィッシャー」です。

良好な水辺の環境の指標とされ、**未来に向かってキラリとかがやき続ける市**をイメージし、**自然愛護のシンボル**としてもふさわしく市内の砂川堀・新河岸川・びん沼川・柳瀬川・難波田城公園などで見られます。

★富士見市HPより記載★

<http://www.city.fujimi.saitama.jp/40shisei/04gyouseizaisei/2012-0329-0923-2.html>

平成24年1月5日～25日までの間、市の鳥を選ぶための人気投票を行い、市民の皆さんから2,719票の投票をいただきました。その結果を参考に市の鳥選定委員会で決定し、4月10日にキラリふじみで行われた市制施行40周年記念式典で、市の鳥が「かわせみ」となったことを発表しました。

人気投票の結果(上位5種)

鳥の種類	得票数	得票率
カワセミ	720票	26%
カルガモ	346票	13%
ハクセキレイ	329票	12%
メジロ	240票	9%
ダイサギ	209票	8%

かわせみってどんな鳥？

頭から背中にかけて翡翠(ひすい)色(光沢のある青緑色)、お腹はオレンジ色をしている色鮮やかな鳥で「水辺の宝石」と称されます。また、くちばしは大好きな小魚などを捕まえるために大きく、その姿はとても愛嬌(あいぎょう)があり、誰からも愛され、親しまれる鳥です。

未来に向かってキラリとかがやき続ける市をイメージし、自然愛護のシンボルとしてもふさわしいことなどから、市制施行40周年を記念して市の鳥に定められました。



富士見江川付近のかわせみ

写真提供：財団法人 埼玉県生態系保護協会 富士見支部

○かわせみの特徴

全長 約17センチメートル

(オス)

・頭が大きく、くちばしは黒くて長い。頭から背中にかけて翡翠(ひすい)色(光沢のある青緑色)、お腹はオレンジ色である。

・ツッチーやチーッと甲高い声で鳴く。

・餌は主に小さな川魚で、水辺の木などにこもって獲物を探し、見つけると水面に飛び込んで捕食する。ザリガニやカエルなども食べる。

(メス)

・下くちばしの先端から4分の3くらいまでオレンジ色をしている。全体的にオスよりも淡い色をしているといわれる。

○繁殖について

・切り立った河川の土手に50センチメートル～90センチメートルの穴を掘って巣穴とする。

・都市部では、コンクリート護岸の水抜きパイプなども巣穴とする。

・一夫一妻

・びん沼自然公園、柳瀬川では巣穴を確認(財団法人 埼玉県生態系保護協会 富士見支部による情報)。

・繁殖期は3月～8月で、2回繁殖することもある。

★カワセミについて★

上記のカワセミの特徴に、更にインターネットなど（ウィキペディアなど）から得た情報を、書き加えます。

- ・ブッポウソウ目カワセミ科

- ・大きさ約17cm（これはクチバシも含めての長さで、クチバシが4cm前後。したがって体は、ほぼスズメほどの大きさ。約四分の1がクチバシ）

- ・クチバシ特徴・・・細くとがったその形は空気や水の抵抗を受けにくく、水中に飛び込んで魚を捕まえるのに理想的とされる。空気抵抗を極力少なくするため、500系新幹線のノーズデザインはカワセミのクチバシを模して造られた。

また、メスの下のクチバシは**口紅**のような色をしている。

- ・カワセミの色・・・カワセミの青色は色素によるものではなく、羽毛にある微細構造により光の加減で青く見える**構造色**。シャボン玉がさまざまな色に見えるのと同じ原理という。

この美しい外見から「溪流の宝石」などと呼ばれる。特に両翼の間からのぞく背中の水色は鮮やかで、光の当たり方によっては緑色にも見える。

- ・求愛活動（繁殖期）・・・オスがメスへ獲物をプレゼントする「**求愛給餌**」がみられる。メスが食べやすいように、魚の頭の方を向けて差し出し、受け取ったらカップル成立。

つがいになると親鳥は垂直な土手に巣穴をつくる。最初は垂直の土手に向かって突撃し、足場ができた所でくちばしと足を使って50－90cmほどもある横穴を掘る。穴の一番奥はふくらんでおり、ここに3－4個の卵を産む。

卵からかえったヒナは親鳥から給餌をうけながら成長し、羽毛が生え揃うと巣立ちする。若鳥は**胸の橙色**と**足に褐色味**がある。

- ・非繁殖期・・・カワセミは**縄張り**意識が強く、1羽で行動する。

■そして、市制施行40周年記念の「市の鳥」候補に入った12の鳥

鳥の名前の背景色が水色・・・川や川辺などにいる鳥

鳥の名前の背景色が緑色・・・野原や林、田などにいる鳥

※鳥の写真は、「(財)埼玉県生態系保護協会 富士見支部」の提供です。

① 『カルガモ（軽鴨）』



カモ目カモ科

大きさは約60cm。全体に黒褐色で背の羽根は白くうろこ状に見えます。雑食で種子・水生植物・昆虫などをたべます。沼や河川などに棲息し、市内では多くの河川や水谷地域の田んぼで一年中見ることができます。「営巣・子育てをする姿は身近な自然を守っていく意識を醸成（じょうせい）します」。

② 『ハクセキレイ（白鶺鴒）』



スズメ目セキレイ科

大きさは約21cm。背と胸の所は黒いが、お腹は白く、長い尾が特徴です。世界に広く分布しており河川・農耕地・市街地の空き地など、開けた環境をこのみますが、本来は清流の鳥です。主に昆虫などを捕食、尾を振りながら地上を早いスピードでえさをさがします。市内全域で確認されています。「身近な鳥だけにきれいな水辺を守っていく指標となります」。

③ 『メジロ（目白・繡眼児）』



スズメ目メジロ科

大きさは約12cm。ウグイス色で胸は白、目の周囲の白い輪が特徴であり、名前の由来です。よくウグイスと間違われます、寒冷地を除く全国の低地から山地まで広く分布しています。市内全域で見られ、花木の花蜜を巡って生活する昔から親しまれている鳥です。「花木あふれる美しいまちづくりをイメージします」。

※メジロにはお互いに押し合うように、ぴったりと枝に並ぶ習性がある。このことから、込み合っていることや物事が多くあることを意味する慣用語の「目白押し」あり。

④ 『ダイサギ（大鷺、）』



コウノトリ目サギ科

通称「シラサギ」大きさは約100cm。クチバシと首や足が長く、白い羽です。水田・湿地・川・干潟などに住んでいて、魚・両生類・ザリガニ・昆虫などを捕食します。市内の多くの川や田んぼで見受けられます。「白く優雅に舞う姿はいきいきと未来へ羽ばたくイメージで、市民の意識の高揚を図ります」。

⑤ 『コゲラ（小啄木鳥）』



キツツキ目キツツキ科

大きさは約15cm。頭から背は黒茶色で白い斑点（はんてん）もようがたくさんあります。1年を通して市内（特に谷津の森公園や水子貝塚公園）で見ることが出来ます。木を突いて小さな虫を食べ、飛び立つ時に「ギィ…」と鳴きます。「ユニークな姿で親しみやすい鳥です」。

⑥ 『オナガ（尾長）』



スズメ目カラス科

大きさは約36cm。黒い帽子をかぶったような頭で、尾の長い鳥で、「ゲーィ」とか「ゲーィキュキュキュ」と鳴きます。本州中部から北部の山地や林や人家付近でも見られ、市内全域で見ることができます。「市内の森を守っていく身近な指標種となります」。

⑦ 『キセキレイ（黄鵲鴿）』



スズメ目キセキレイ科

大きさは約20cm。背は青灰色、腹が黄色で、主に溪流などの水辺に棲息（せいそく）します。尾を上下に振る習性があります。市内では新河岸川・びん沼川・富士見江川・柳瀬川などで良く見られます。「市民が川や水を大切にしている心を感じます」。

⑧ 『イソシギ（磯鷗）』



チドリ目シギ科

大きさは約20cm。頭から体の一部が灰色で白い腹、歩くとき尾を上下に振り、川虫や飛ぶ虫を食べます。川原や沼などでよく見かけ市内の新河岸川・びん沼川・富士見江川・柳瀬川でも確認されています。「たくさんの虫を育むきれいな河川環境が求められます」。

⑨ 『キジバト（雉鳩）』



ハト目ハト科

大きさは約33cm。茶色がかった羽で翼や背に茶色のうろこ模様で、首には縞模様があります。鳴き声は「デデーポッポー」とよく聞くことがあります。市内でよく見かける野生のハトです。「平和への願いと身近な自然を守っていく市民の意識を醸成（じょうせい）します」。

⑩ 『モズ（百舌、百舌鳥、鴟）』



スズメ目モズ科

大きさは約20cm。羽は黄褐色です。どいくちばしで、昆虫を主食としており、時には小鳥もとります。捕えた獲物を木の枝に突き刺したり、木の枝股に挟む行を行います。夏の終わりころから「キーキー」と甲高い声で縄張りを宣言します。市内では水谷地域の田んぼ・びん沼自然公園で見ることができます。「その生息空間は豊かな生態系を表します。たくましさ豊かな自然を象徴（しょうちょう）します」。

⑪ 『カイツブリ（鴛、鶺鴒〈へきてい〉）』



カイツブリ目カイツブリ科

大きさは約27cm。茶色で夏は顔から首にかけて赤くなります。くちばしのつけ根に黄白色の模様があります。常に水上で生活し、翼が短く飛ぶことは得意ではありません。カモのような水かきはないが、それぞれの足の指にひれがあり、泳ぎや潜水はうまく、主に川や沼に棲息し潜って小魚をたべます。市内の主な川で見られます。「水辺環境を守るマスコットの存在です」。

⑫ 『キジ（雉子、雉）』



キジ目キジ科

大きさは約70cm。
林やその周辺にすみ、野原などが一体となった広い場所の保全が必要となります。

日本の国鳥です。

■ ついで情報：富士見市域にもオオタカがみられるようになったというニュースより

『オオタカ（大鷹）』



タカ目タカ科

大きさは約50～60cm。古今、タカといえばオオタカを指すことが多く、平地から山岳地帯まで生息している。生態系の自然が健全でないと生息できない。飛翔能力が高く、飛ぶ速さは水平飛行時で時速80km、急降下時には時速130kmに達する。優れたハンターであることから、厳しい訓練を経た後、鷹狩に使われた。

■ 埼玉県の「県の鳥」

『シラコバト（白子鳩）』



ハト目ハト科

大きさは約33cm。市内東大久保近隣に生息している野鳥の白子鳩（シラコバト）は、国の天然記念物で埼玉県の鳥に指定されています。南ヨーロッパ・北アフリカから南アジアに分布、ハト目ハト科に分類される鳥類で、シラバト・ノバトなどとも呼ばれます。キジバトよりも少し小さくて細く、白っぽい色で、頸（くび）の後ろの黒い線が特徴、ポポーポウ・ポポーポウという声で鳴きます。全身白みがかった淡褐色で、頸の後ろに黒い輪模様があり、数珠かけ鳥とも言われています。

★ウィキペディアより

埼玉県の県鳥（1965年11月3日に指定）及び越谷市の市の鳥（1988年11月3日に指定）であり、埼玉県のマスコットコバトンのモチーフにもなっている。童謡『鳩ぽっぽ』は、その鳴き声をモチーフにしたとされている。作詞東くめ（1877年-1969年）、作曲は滝廉太郎。

★埼玉県ホームページより

<http://www.pref.saitama.lg.jp/site/sub-tayouseihozen/shirakobato-top.html>

》 シラコバトについて

[印刷用ページを表示する](#) 掲載日：2014年4月28日更新

シラコバトについて

ハト科に属し、シラバト、ノバトなどとも呼ばれ、山鳩(キジバト)の仲間ですが、やや小型で尾だけが長く、ほっそりしています。首に黒い横線が走っているのが特徴で、国内では、主に本県の東部地域を中心に生息しています。

昭和31年(1956年)に「越ヶ谷のシラコバト」として国の天然記念物に指定されており、昭和40年11月3日に「県民の鳥」に指定されました。

県のシンボルであり、コバトンのモデルにもなっています。



小峯昇氏撮影



■ 調査記録

『富士見市史(上巻)』より

調査期間： 昭和55年(1980)9月～57年(1982)8月の2年間

約100種の鳥類が記録し、

自然環境を三つの領域

- ① 川水系を主体とする水域
- ② アカマツ・コナラを主体とする自然林(二次林)
- ③ 市街地

に大別している。

<水域の鳥>

◇荒川で記録された鳥類は21科46種

留鳥（りゅうちょう）は、カルガモ、カイツブリなど21種

冬鳥は、オナガガモ、ホシハジロ、タヒバリ、オオジュリンなど12種

夏鳥は、カッコウ、コチドリなど6種

個体数が多かったのは、ムクドリ、オナガガモ、カルガモ、ホシハジロの順

ここで繁殖している種は、カルガモ、セッカ、ホオジロの3種で、

他の43種は採食の為に訪れた種、または通過した種。

◇新河岸川で記録された鳥類は17科30種

留鳥は、コサギ、キジバト、ヒヨドリなど18種

冬鳥は、タシギ、タヒバリ、ジョウビタギ、ツグミ、カシラダカ、アオジの6種

夏鳥は、コチドリ、ツバメ、オオヨシキリ、チュウサギの4種

個体数が多かったのは、スズメ、ムクドリ、キジバト、タヒバリの順

しかし、これらの殆どは、この地域の河川のもつ環境よりも、隣接する旧耕田、稲田、樹木などのもつ要素を求めて集まったものと思われる。

◇びん沼で記録された鳥類は21科49種

留鳥は、カイツブリ、ヒヨドリ、スズメ、ムクドリなど26種

冬鳥は、カシラダカ、アオジ、ツグミなど14種

夏鳥は、ヒクイナ、ツバメなど4種

個体数が多かったのは、スズメ、ムクドリ、カシラダカの順

ここで繁殖している種は、カイツブリ、カルガモ、バン、キジバト、ヒヨドリ、ヒバリの6種

※環境との結びつきをみると、水面にはカイツブリ、マガモ、カルガモ、キンクロハジロ、オオバンなどが認められた。これらは沼が生産する魚類、水生昆虫をはじめ水生植物を餌にし、水面を休息の場として利用している。カルガモとバンはアシ原を営巣地としており、スズメ、オオジュリン、アオジなどはこのアシ原をすみかとして利用している。そのほか多くの種がここを避難場所としており、びん沼の鳥にとっては重要な生活の場所と考えられる。

◇柳瀬川沿岸の休耕田で記録された鳥類は24科59種

この中には、飼い鳥が野生化したものとしてベニスズメ、セキセイインコ、ヘキチョウ、キンランチョウなどが含まれている。

留鳥は、スズメ、ムクドリなど26種

冬鳥は、オオジュリン、タヒバリなど16種

夏鳥は、オオヨシキリ、ツバメなど8種

また旅鳥として、ショウドウツバメ、オオジシギ、タカブシギ、キアツシギなどが認められた。

個体数が多かったのは、スズメ、ムクドリ、コガモ、ハマシギの順

ここで繁殖している種は、オオヨシキリ、セッカのみで、アシの茎に営巣。

◇勝瀬の体耕田で記録された鳥類は7科37種

留鳥は、キジバト、ヒバリなど21種

夏鳥は、コチドリ、シロチドリ、イワツバメ、ツバメ、オオヨシキリの5種

冬鳥は、カツラグカ、アオジなど7種

個体数が多かったのは、スズメ、ムクドリ、カフラヒフの順

◇上南畑の水田地帯で記録された鳥類は15科30種

留鳥は、キジバト、ヒバリなど21種

夏鳥は、アマサギ、チュウサギ、コチドリ、シロチドリ、ツバメの5種

冬鳥は、タシギ、タヒバリ、ツグミ、カシラダカの4種

個体数が多かったのは、スズメ、ムナグロ、ヒバリ、ムクドリの順

またカワラヒフ、タヒバリの個体数も多くこれらを加えた6種が水田地帯の代表的な種と考えられる。

<自然林（二次林）の鳥>

過去に火災、伐採その他の人為的行為により一度破壊された森林が、再び林としての形態を保っているのが二次林で、鳥は食物、樹種、営巣場所などの要求が満たされる所を選んで生活している。

◇針ヶ谷のコナラ、クリ、シラカシ林で、記録された鳥類は17科31種

留鳥は、ヒヨドリ、キジバト、モズなど16種

夏鳥は、カッコウ、ホトトギス、アオバズクなど5種

冬鳥は、タヒバリ、ツグミなど6種

個体数が多かったのは、ムクドリ、キジバト、スズメの順

◇関沢のコナラ、クヌギ林で、記録された鳥類は13科17種

留鳥は、シジュウカラ、ヒヨドリなど11種

夏鳥は、ツバメのみ

冬鳥は、ツグミ、アオジ、メジロの3種

この林は比較的人の出入りが多いためか、繁殖していたのは留鳥のシジュウカラ1種のみであった。

◇貝塚山のアカマツ林で、記録された鳥類は16科34種

留鳥は、シジュウカラ、ヒヨドリなど15種、

夏鳥は、カッコウ、ツツドリ、ツバメの3種

冬鳥は、シメ、シロハラ、ジョウビタキなど7種

<市街地の鳥>

市街地といっても、家屋が密集しているところ、また散在しているところ、さらにコンクリートの建造物や木造家屋もある。庭木などの自然環境的要素を含んでいたとしても、微視的には市街地全体の環境は、流動的に変化しているのが特徴である。そして鳥は、常にヒトや車の危険にさらされていると同時に騒音・排気ガスなどの影響を受けている。そのため、そこに生息する鳥の営巣・採餌・逃避場所などがどのくらいあるかによっても鳥類の構成種、個体数が異なってくる。

ここでは本市で最も人の往来の激しい場所の一つである鶴瀬駅周辺と、人工的に作られた自然環境を有する鶴瀬団地の鳥相について述べる。

◇鶴瀬駅周辺の繁華街で、記録された鳥類は7科9種

留鳥は、キジバト、ヒヨドリ、カフラヒフ、スズメ、ムクドリ、ドバト（飼い鳥）

夏鳥は、ツバメ

冬鳥は、ツグミ

漂鳥の、ウグイス

市街地は人為的に作られた特殊な環境が多いためか、鳥類の生息環境には適していないと思われる。スズメとムクドリはしばしば観察されたが、これらは屋根裏や戸袋などに営巣可能な鳥であろう。ヒヨドリとキジバトは主に雑木林で繁殖する鳥で、上空あるいは電線などで観察されたものである。

◇鶴瀬団地で、記録された鳥類はキジバト、ヒヨドリなど10科11種

人為的ではあるが自然環境が存在するのに、各月の記録種は2～7種で少なかった。スズメ、ムクドリ、ヒヨドリ、キジバトなどがしばしば観察されたが、近くの人家や学校周辺から飛来したものも多い。観察場所はキジバト、スズメ、ムクドリは主に電線や芝生、カウラヒワは空中と電線、シジュウカラ、ヒヨドリ、オナガは樹木であった。またそれぞれの棟の前にある芝生は、ここに生息する鳥類の主要な餌場になっていた。

■調査で記録された「鳥類リスト」

番号	種名	渡り	生息場所
1	カイツブリ科 カイツブリ	留	沼、河川
2	ウ科 カワウ	迷	沼
3	サギ科 ヨシゴイ	夏	アシ原
4	ゴイサギ	留	沼、森林
5	アマサギ	夏	水田、湿地、沼
6	ダイサギ	漂	水田、沼
7	デュウサギ	夏	水田、沼
8	コサギ	留	水田、湿地、沼
9	ガンカモ科 マガン	迷	河川
10	マガモ	冬	沼、湿地
11	カルガモ	留	水田、沼
12	コガモ	冬	湿地、沼
13	ヒドリガモ	冬	河川、沼
14	オナガガモ	冬	河川、沼
15	ハシビロガモ	冬	河川、沼
16	ホシハジロ	冬	河川、沼
17	キンクロハジロ	冬	河川、沼
18	ワシタカ科 サシバ	夏	森林、湿地
19	ハヤブサ科 チョウゲンボウ	冬	アシ原
20	キジ科 ウズラ	漂	アシ原
21	コジュケイ	留	森林
22	ヤマドリ	留	森林、アシ原
23	キジ	留	森林、アシ原
24	クイナ科 クイナ	冬	アシ原、湿地
25	ヒクイナ	夏	アシ原、湿地
26	バン	留	沼、湿地
27	オオバン	迷	沼
28	タマシギ科 タマシギ	迷	水田
29	チドリ科 コチドリ	夏	河原、湿地
30	イカルチドリ	留	河原、湿地
31	シロチドリ	夏	湿地、荒地
32	ムナグロ	旅	水田、湿地
33	ケリ	漂	湿地
34	タゲリ	冬	水田、湿地
35	シギ科 ハマシギ	冬	湿地、沼
36	クサシギ	旅	水田、湿地
37	タカブシギ	旅	水田、湿地
38	キアシシギ	旅	湿地、河川
39	イソシギ	留	河川、湿地
40	デュウシャクシギ	迷	湿地
41	タシギ	冬	水田、湿地
42	オオジシギ	旅	湿地
43	カモメ科 ユリカモメ	冬	河川
44	アジサシ	旅	河川
45	コアジサシ	夏	河川
46	ハト科 キジバト	留	森林、水田
47	ホトトギス科 カツコウ	夏	森林
48	ツツドリ	夏	森林
49	ホトトギス	夏	森林
50	フクロウ科 アオバズク	夏	森林

番号	種名	渡り	生息場所
51	カワセミ科 カワセミ	留	河川、沼
52	キツツキ科 コゲラ	迷	森林
53	ヒバリ科 ヒバリ	留	水田、アシ原、荒地
54	ツバメ科 ショウドウツバメ	旅	河川、アシ原
55		夏	アシ原、家屋
56		夏	コンクリートの建物
57	セキレイ科 キセキレイ	留	河川、湿地
58		留	河川、湿地
59		留	河川、湿地
60		冬	水田、河川
61	サンショウクイ科 サンショウクイ	迷	森林
62	ヒヨドリ科 ヒヨドリ	留	森林
63	モズ科 モズ	留	アシ原、森林
64	ヒタキ科 ジョウビタキ	冬	アシ原、森林
65		旅	水田、アシ原
66		漂	森林
67		旅	森林
68		冬	森林、アシ原
69		冬	アシ原、水田、森林
70		漂	アシ原、森林
71		夏	アシ原
72		夏	アシ原
73		旅	森林
74		迷	森林
75		留	アシ原、水田
76		迷	森林
77		迷	森林
78	シジュウカラ科 ヒガラ	迷	森林
79		留	森林
80	メジロ科 メジロ	冬	森林
81	ホオジロ科 ホオジロ	留	アシ原
82		迷	アシ原
83		冬	アシ原
84		冬	アシ原、森林
85		冬	アシ原
86	アトリ科 カワラヒワ	留	アシ原、水田、荒地
87		冬	アシ原
88		漂	森林
89		冬	森林
90	ハタオリドリ科 スズメ	留	家屋、アシ原、水田
91	ムクドリ科 コムクドリ	夏	森林
92		留	森林、湿地、家屋
93	カラス科 カケス	漂	森林
94		留	森林
95		留	森林
96		留	森林
97	鯛鳥 ドバト	留	家屋、水田
98		留	アシ原
99		留	アシ原、森林
100		留	アシ原
101			アシ原

注 留:留鳥,夏:夏鳥,冬:冬鳥,旅:旅鳥,漂:漂鳥,迷:迷鳥

記載日：2014/6/22

この内容は、「富士見市史」、「郷土富士見検定問題集」、富士見市HP、埼玉県HPから抜粋し、引用させて頂いております。また、鳥の写真は、(財)埼玉県生態系保護協会 富士見支部」の提供です。